

大学初年次学生の“みる”スポーツの実態

—高等学校での運動系部活動の所属経験に焦点を当てて—

古田 康生 (岐阜協立大学経営学部)

小原 慶祐 (岐阜協立大学大学院経営学研究科)

原田 理人 (岐阜協立大学経営学部)

山本 孔一 (環太平洋大学短期大学部)

渡部 昌史 (新見公立大学健康科学部)

キーワード：初年次大学生、みるスポーツ

1. 序論

1.1 みるスポーツの現状

2010年、文部科学省は「スポーツ立国」の実現に向けて必要な施策を示す「スポーツ立国戦略」を策定した⁴⁾。その後、2011年にスポーツ基本法が施行された後、スポーツ基本計画の策定が進められ、2020年の現在は、第2期スポーツ基本計画(平成29年から平成33年の5か年)が進行中である⁵⁾。

第2期スポーツ基本計画では、スポーツ政策としてスポーツを“する”だけでなく、“みるスポーツ”、“ささえる(育てる)スポーツ”といった多様な形での「スポーツ参画人口」を拡大し、スポーツ界が他分野との連携・協働を推進し、「一億総スポーツ社会」の実現に向けて取り組むことが明記されている⁵⁾。

スポーツ基本計画に記載されている「みるスポーツ」、すなわち、スポーツ観戦およびスポーツ鑑賞(以下、観戦・鑑賞とする)には、大別して、各競技種目の試合や大会が実施される競技場やアリーナ(体育館)などに出向いて直接、そのスポーツ種目を観戦する方法(以下、観戦とする)と、テレビやラジオ、インターネットなどを利用してスポーツを鑑賞する方法(以下、鑑賞とする)がある。直接のスポーツ観戦では、一般社団法人日本野球機構のプロ野球、朝日新聞社や毎日新聞社と公益財団法人日本高等学校野球連盟が阪神甲子園球場を舞台に開催する全国高等学校野球選手権大会(通称、夏の甲子園)、選抜高等学校野球大会(通称、センバツや春の甲子園)などといった高校野球、公益社団法人日本プロサッカーリーグのJリーグなどが代表的な種目と考えられるが、一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する12の競技団体なども貴重なスポーツ観戦の機会を提供しているといえる。

スポーツ鑑賞に関しては、地上波によるテレビ放送だけでなく、衛星放送による多様な専門チャンネルの充実、各競技団体によるインターネット配信の拡充などにより、視聴者の利便性が高まっていると考えられる。

スポーツ庁が、10代から70代の幅広い年齢層の20,000人を対象に調査し、2019年に報告した「平成30年度『スポーツの実施状況等に関する世論調査』について」⁶⁾によると、この1年間に直接現地でスポーツを観戦した人は、26.8%(男性:32.4%、女性:21.2%)としている。一方、テレビやインターネットで鑑賞した人は、75.7%(男性:79.8%、女性:71.6%)と報告しており、今日では多くの人々が直接現地での観戦だけでなく多様なメディアを通じてスポーツを鑑賞している現状が理解できる。

1.2 若年者層の「みるスポーツ」の現状

日本人の「スポーツ観戦・鑑賞」の実態を理解する統計資料の一つに公益財団法人日本生産性本部 余暇創研が発行する「レジャー白書」がある。この報告書は毎年発行され、2018年に発行されたレジャー白書2018では、全国の15から79歳の男女、3,214名を対象にインターネット調査を実施し、各レジャー種目への参加率や参加希望率を報告している。レジャー白書2018が報告した2017年の「スポーツ観戦(テレビは除く)」の性・年代別参加率は、男性の参加率平均値が16.8%、女性の参加率平均値は、10.8%で全体として、13.7%と報告している。さらに年代別の詳細¹⁾は、男性の10代の参加率が12.5%、20代15.2%、30代19.4%、40代16.0%、50代19.1%、60代16.6%、70代15.2%であった。一方、女性では10代が12.6%、20代9.4%、30代10.8%、40代13.3%、50代10.2%、60代8.9%、70代10.8%であった。性・年代構成比²⁾では、男性が60.5%であり、年代別構成比は、10代が2.8%、20代17.1%、30代10.7%、40代11.1%、50代11.0%、60代10.3%、70代7.4%であった。一方、女性では39.5%の年代別構成比は、10代が2.7%、20代4.2%、30代5.8%、40代9.0%、50代5.9%、60代5.8%、70代6.2%であったと報告されている。

2018年の報告で注目すべき事項の一つに観戦参加率の性差がある。つまり、10代の参加率は、男性と女性が同程度の値であるが、男性ではその後も高値を維持するのに対して、女性は40代を除きその他の年齢層では低値である。また、男性10代の値は全ての年代より低値であり、平均値よりも4.3ポイント下回っている。10代では、高等学校や大学での体育・スポーツ関連実技授業や運動系部活動やサークルへの所属という他世代とは異なる背景があり、スポーツ観戦の参加率に肯定的に作用すると考えられるが、多世代との明確な差異は認められない。

1.3 本研究の目的

レジャー白書のスポーツ観戦参加率では各年代別の参加率は明らかとなっているものの、スポーツ志向性やスポーツ実践との関連は検討されていない。また、スポーツ庁などが報告している競技場などでの直接のスポーツ観戦やテレビやインターネットにより配信されるスポーツ番組のスポーツ鑑賞といった実態調査の多くは、10歳代から70歳代までの合計値を報告する調査結果が多い。若年者層、特に大学生の「スポーツ観戦・鑑賞」に関する参加率と参加希望率の実態を把握することや関連する因子との検討は、今後のスポーツ観戦・鑑賞に関連する市場の動向や市場の活性化のためには必要な情報である。

そこで本研究では、大学での体育・スポーツ授業や部活動、サークルといった日常的にスポーツに関わる機会が多い大学初年次学生を対象にスポーツ観戦・鑑賞の実態把握を試みた。また、高等学校での運動系部活動の所属経験は、スポーツに対して肯定的に作用し、スポーツ観戦や鑑賞といった行動におよぼすと考え、その関連性を検討することを目的とする。

2. 調査方法

2.1 用語の定義

本研究では、“みるスポーツ”が研究対象である。スポーツを観る方法にはいくつかあるが、競技場や体育館(アリーナ)などの試合・大会会場に向き、直接観戦する方法を「観戦」とする。一方、テレビやラジオ、インターネットなどの各種メディアを利用してスポーツを視聴(みる)する方法を観戦と区別するため本研究では「鑑賞」とした。

2.2 みるスポーツの対象

“みるスポーツ”の観戦・鑑賞対象は、日本国内のトップスポーツリーグに属するプロ野球、サッカーJ

リーグやFリーグ、なでしこリーグ、バレーボールのVリーグ、バスケットボールのBリーグに加えて、ソフトボールやハンドボールの日本リーグも対象とした。また、大学生や高校生を対象とした野球やサッカー、ラグビーといった全国大会レベルの試合・大会の観戦・鑑賞も含めた。一方、地方大会や中学生以下の大会・試合の観戦・鑑賞、ニュース番組などでの短時間の試合結果放送の視聴といった鑑賞は対象外とした。

2.2 調査対象者

調査対象となった学生は、東海地域に所在するA大学で経済学や経営学、看護学を専攻する学生、関西地域に所在するB大学で経済学を専攻する学生の計156名とした。今回の調査では大学初年次学生を対象とし、高等学校での運動系部活動所属経験による差異を検討する目的のため、全調査対象者を高等学校での運動系部活動所属学生（以下、男子経験者群及び女子経験者群とする）と高等学校での運動系部活動に所属経験がない学生（以下、男子非経験者群と女子非経験者群とする）に大別した。さらに、経験者群の学生で、大学でスポーツを専攻する学生をスポーツ学生群（以下、男子スポーツ学生群及び女子スポーツ学生群とする）とした。各群の調査対象学生数は表1の通りである。

	経験群	非経験群	スポーツ学生群	小計値
男子学生	47	16	41	104
女子学生	13	18	21	52
合計値	60	34	62	156

単位:人数

2.3 調査対象学生が居住する地域周辺の「みるスポーツ」に関する環境

A大学が所在する地域をホームタウンとする主なトップスポーツチームは、サッカー（J2）、バスケットボール（B3）、女子ソフトボール（2部）、バレーボール（Vリーグ2部）、ハンドボールがある。なお、隣接する地域（県）には、プロ野球や複数のサッカー（J1）、バスケットボール、ラグビーといった種目のトップチームがホームタウンとしている。一方、B大学が所在する地域をホームタウンとする主なトップスポーツチームは、バスケットボール（B1）がある。なお、隣接する地域（府県）には、複数のサッカー（J1、J2）、プロ野球、ラグビー、バレーボールといった種目のトップチームがホームタウンとしている。

2.4 調査方法

自記式質問紙法を用いた。先行調査^{3),6)}を参考にスポーツ観戦・鑑賞に関する調査用紙を作成し、無記名にて回答させた。集合法を用い、調査主旨や記入方法、倫理的配慮について説明した後、その場で記入させ、記入後に直ちに回収した。回収率は100%であった。回答は、およそ20分間程度であった。

2.5 調査項目

スポーツ観戦参加率の把握のため、「過去1年間の現地でのスポーツ観戦経験」を種目別に調査した。同様にスポーツ鑑賞参加率は、「過去1年間の各種メディアによるスポーツ鑑賞経験」を種目別に調査した。スポーツ観戦参加希望率では、「今後、スポーツ観戦がしたい種目」を調査した。調査対象としたスポーツ種目は、全国大学体育連合³⁾とスポーツ庁⁶⁾の調査項目を参考に31種目を選択した。それは、プロ野球、高校野球、大学・社会人などその他の野球、サッカーJリーグ、高校サッカー、フットサル（リーグ）、女

子サッカーなでしこリーグ、バスケットボール、大相撲、バドミントン、フィギュアスケート、ソフトボール、体操・新体操、陸上競技、キックボクシング、アイスホッケー、テニス、ゴルフ、卓球、ラグビー、高校ラグビー、ハンドボール、バレーボール、柔道、マラソン・駅伝、モータースポーツ、レスリング、ボクシング、アメリカンフットボール、フィールドホッケー、ボート・ヨットの31競技種目とした。また、スポーツ観戦・鑑賞との関連性を検討するため、高等学校での運動系部活動の所属の有無を調査した。

2.6 倫理的配慮

研究開始に当たり、調査対象者には文書及び口頭にて研究主旨と意義、調査方法、結果の公開において個人情報保護されること、途中での中止が可能でそれによる不利益がないことを説明し、同意を得たうえで実施した。本研究は、岐阜協立大学研究推進委員会「岐阜協立大学における研究者の行動規範」を遵守して遂行した。

2.7 調査期間

本調査は、2019年1月から2月に実施した。したがって、本研究でのスポーツ観戦・鑑賞とは、大半は大学に入学してからのスポーツ観戦・鑑賞の経験となる。

3. 調査結果

3.1 過去1年間のスポーツ観戦及び鑑賞の経験

表2は、過去1年間に実際に競技場などに出向いてスポーツ観戦あるいは、テレビやインターネットなどを利用してスポーツを鑑賞した経験を有する学生の各群の割合である。

	経験群	非経験群	スポーツ学生群	性別平均値
男子学生	95.74	81.25	87.80	90.38
女子学生	69.23	94.44	100.00	90.38
群別平均値	90.00	88.24	91.94	90.38

単位: %

高等学校において運動系部活動所属していた男子経験群及び男子スポーツ学生群、女子スポーツ学生群、及び男子及び女子非経験群は、何らかの方法によりスポーツ観戦・鑑賞を経験していた。一方、女子経験群の割合は、69.23%に留まった。総じて本調査では、90%程度の学生が過去1年間でスポーツ観戦・鑑賞の経験があるという結果を得た。

3.2 過去1年間にスポーツ観戦及び鑑賞した種目

表3は、調査対象学生が、過去1年間に観戦・鑑賞した割合が高い種目の上位である。すなわち、各スポーツ種目がどの程度の学生に観戦・鑑賞されたかを示している。今回は、対象学生の「観戦・鑑賞」経験を把握する目的で調査したので、観戦・鑑賞の頻度といった詳細は分析対象とせず、過去1年間での観戦・鑑賞経験の有無を検討資料とした。

野球、サッカー、バレーボールといったスポーツ種目を観戦・鑑賞した学生の割合が高い結果を得た。例えば、野球では男子学生の経験群が72.34%、非経験群が75.00%、スポーツ群が80.95%とそれぞれ観戦・鑑賞経験を有していた。なお、レスリング、フィールドホッケー、アイスホッケー、アメリカンフットボール、キックボクシング、体操・新体操、卓球、ハンドボール、ボートの9種目は、観戦・鑑賞した学生

の割合がすべての群で5.00%に満たなかったため表示していない。

表3 調査対象学生が観戦・鑑賞したスポーツ種目(%)

種目	男子学生			女子学生		
	経験群	非経験群	スポーツ群	経験群	非経験群	スポーツ群
野球	72.34	75.00	80.95	23.08	72.22	80.00
プロ野球	65.96	68.75	76.19	15.38	50.00	85.00
高校野球	61.70	37.50	75.57	23.08	55.50	80.00
サッカー	51.06	50.00	59.52	38.46	44.44	55.00
サッカー(Jリーグ)	42.55	37.50	50.00	30.77	33.33	30.00
サッカー(フットサル)	4.26	0.00	9.52	0.00	5.56	10.00
バスケットボール	29.79	25.00	35.71	7.69	5.56	15.00
バレーボール	51.06	32.25	50.00	46.15	50.00	80.00
バドミントン	25.53	18.75	19.05	23.08	16.67	20.00
フィギュアアスケート	38.30	18.75	21.43	46.15	61.11	21.43
ラグビー	46.81	31.25	50.00	23.08	33.35	45.00
陸上競技	40.42	12.50	33.33	12.08	38.89	50.00
マラソン・駅伝	44.68	31.25	54.76	30.77	66.67	75.00
ゴルフ	29.79	12.50	19.05	23.08	16.63	30.00
テニス	40.43	25.00	28.57	23.08	27.78	25.00
柔道	14.88	0.00	11.90	7.69	11.11	15.00
大相撲	29.79	18.75	28.57	0.00	11.11	15.00
ボクシング	29.79	31.25	54.76	23.08	16.07	30.00

単位:%
50%以上が太字

3.3 過去1年間のスポーツ観戦の経験

表4は、過去1年間に実際に競技場などに向いて直接スポーツ観戦した経験を有する学生の各群の割合である。

表4 スポーツを観戦した学生の割合(%)

	経験群	非経験群	スポーツ学生群	性別平均値
男子学生	65.96	37.50	65.85	61.54
女子学生	23.08	61.11	80.95	59.62
群別平均値	56.67	50.00	70.97	60.90

単位:%

競技場等に向いてのスポーツ観戦経験を有する学生が最も高値を示したのは、女子スポーツ学生群で、80.95%であった。一方、最も低値を示したのは、女子経験群の23.08%であった。本調査対象では、60.90%の学生が過去1年間に、何らかのスポーツ競技種目を観戦しているという結果を得た。

3.4 過去1年間にスポーツ観戦した種目

表5は、過去1年間に競技場などに向き、そのスポーツ種目を直接観戦した学生の割合が高い種目である。

各スポーツ種目で男子学生の観戦割合が高い種目は、野球、サッカー、ラグビー、陸上競技、マラソン・駅伝といったスポーツ種目であった。一方、女子学生では、野球と陸上競技、マラソン・駅伝が上位になっ

たが、多くの種目で「観戦経験なし」であり、男子学生とは傾向が異なった。運動系部活動の所属経験によるスポーツ観戦の傾向では男子学生では陸上競技にて 10 ポイント以上の違いが認められたが女子学生においては顕著な差異は認められなかった。

表5 調査対象学生が直接観戦したスポーツ種目(%)

種目	男子学生			女子学生		
	経験群	非経験群	スポーツ群	経験群	非経験群	スポーツ群
野球	51.06	31.25	51.22	15.38	38.89	42.86
プロ野球	42.55	25.00	31.71	15.38	22.22	19.05
高校野球	34.04	6.25	41.46	0.00	22.22	28.57
サッカー	14.89	18.75	17.07	0.00	5.56	9.52
サッカー(リーグ)	10.64	6.25	14.63	0.00	0.00	0.00
サッカー(フットサル)	8.51	18.75	4.88	0.00	5.55	9.52
バスケットボール	4.26	0.00	0.00	0.00	0.00	4.76
バレーボール	8.51	0.00	9.76	0.00	5.56	9.76
バドミントン	4.26	6.25	0.00	0.00	0.00	0.00
フィギュアアスケット	4.26	0.00	0.00	0.00	5.56	0.00
ラグビー	10.64	6.25	2.44	0.00	0.00	0.00
陸上競技	10.64	0.00	12.20	7.69	5.56	4.76
マラソン・駅伝	8.51	6.26	17.00	0.00	5.56	14.29
ゴルフ	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
テニス	2.13	0.00	2.44	7.69	0.00	0.00
柔道	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	4.76
大相撲	4.26	0.00	0.00	0.00	0.00	4.76
ボクシング	2.13	0.00	2.44	0.00	0.00	0.00

単位: %
10%以上が太字

3.5 今後のスポーツ観戦・鑑賞の希望

表6は、今後にスポーツ観戦・鑑賞したいスポーツ種目の有無に対する結果である。すなわち、「観戦・鑑賞したいスポーツ種目」がある学生の割合を示した。

表6 今後スポーツを観・鑑賞したい学生の割合(%)

	経験群	非経験群	スポーツ学生群	性別平均値
男子学生	63.83	56.25	67.50	64.08
女子学生	53.85	66.67	77.27	67.92
群別平均値	61.67	61.76	70.97	65.38

単位: %

本調査で対象となった学生の 65.38%の学生が、「今後何らかのスポーツ種目を観戦・鑑賞したい」と希望している結果を得た。高等学校での運動系部活動の所属経験に関わらず、同程度の学生が観戦・鑑賞を希望する結果であった。一方、スポーツを専攻する学生で観戦・鑑賞を希望する学生の割合は、70.97%であり一般学生と比較して10ポイント程度高い値を示した。

3.6 今後のスポーツ観戦・鑑賞を希望する種目

表7は、対象学生が「今後にスポーツ観戦・鑑賞したい」と回答した割合が高いスポーツ種目である。男子学生が観戦・鑑賞を希望する種目は、野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ゴルフ、テニス、ボクシングといった種目であった。

一方、女子学生では、男子学生同様に野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールといった種目に加えて、陸上競技、バドミントン、フィギュアスケートといったスポーツ種目が上位となった。

運動系部活動の所属経験による差異では、男子学生においてラグビーが高くなる傾向が認められたがそれ以外の種目において顕著の違いは認められなかった。女子学生では、ゴルフ、テニス、バスケットボール、ラグビーにおいて10ポイント以上の希望率の違いが認められ、運動系部活動経験者群が非経験者群よりも高くなる傾向を示した。しかし、上記以外のスポーツ種目においては、明確な観戦・鑑賞希望率の差異は認められなかった。

表7 調査対象学生が観戦を希望するスポーツ種目(%)

種目	男子学生			女子学生		
	経験群	非経験群	スポーツ群	経験群	非経験群	スポーツ群
野球	29.79	26.67	59.09	15.38	16.67	40.00
プロ野球	19.15	26.67	50.00	7.69	5.56	30.00
高校野球	17.02	13.33	40.91	7.69	11.11	25.00
サッカー	21.28	20.00	27.27	23.08	33.33	20.00
サッカー(Jリーグ)	14.89	13.33	18.18	15.38	22.22	15.00
サッカー(フットサル)	8.51	6.67	9.09	7.69	0.00	10.00
バスケットボール	10.64	26.67	13.64	30.77	11.11	30.00
バレーボール	6.38	6.67	27.27	15.38	27.70	17.50
バドミントン	8.51	0.00	18.18	15.38	16.67	12.50
フィギュアスケート	8.51	0.00	18.18	23.08	22.22	7.50
ラグビー	10.64	0.00	31.82	15.38	5.56	20.00
陸上競技	6.38	0.00	22.73	7.69	22.22	15.00
マラソン・駅伝	0.00	0.00	9.09	7.69	5.56	5.00
ゴルフ	10.64	13.33	18.18	23.08	5.56	17.50
テニス	10.64	13.33	18.18	23.08	5.56	17.50
柔道	12.77	0.00	4.55	15.38	0.00	2.50
大相撲	4.26	6.67	0.00	0.00	0.00	12.50
ボクシング	17.02	20.00	22.56	0.00	5.56	13.00

単位:%
10%以上が太字

4. 考察

本研究では、大学での体育・スポーツ実技の授業やスポーツ系の部活動やサークルなどにて日常的にスポーツと関わる初年次大学生の“みるスポーツ”の実態を把握するため、過去1年間のスポーツ観戦及び鑑賞の経験と今後の観戦・鑑賞の希望を自記式質問紙を用いて調査した。特に今回は、高等学校での運動系部活動の所属経験がスポーツに対して肯定的に作用するのではないかと考え、スポーツ観戦・鑑賞といった行動との関連に焦点を当てて分析を試みた。

本研究では、調査対象学生が過去1年間にスポーツ観戦・鑑賞した割合は、90.38%であった。高等学校での運動系部活動の所属経験を有する経験群だけでなく、非経験群であってもスポーツ観戦や鑑賞の経

験があり、明確な差異は認められなかった。ただし、女子学生では、予想に反して女子経験群のスポーツ観戦・鑑賞の経験値が最も低値を示し、女子非経験群よりも25.21ポイント低い値を示した。したがって、本研究では、スポーツ観戦・鑑賞に対する関心と行動は、高等学校での運動系部活動の経験よりも他の要因が作用している可能性が示唆された。

観戦・鑑賞した学生の割合が多いスポーツ種目では、野球が最も高値を示し、サッカー、マラソン・駅伝、バレーボールの順であった。男子学生では、運動部経験群とスポーツ学生群は、多くの種目で非運動経験群よりも高値を示した。10ポイント以上の違いを示した種目では、バレーボール、ラグビー、陸上競技、マラソン・駅伝、柔道であった。今回は、詳細の観戦・鑑賞の理由を質問項目に含めていないためその要因は不明であり、今後の調査の課題となった。女子学生では、男子学生と同様に、野球、サッカー、バレーボールが高値であった。また、フィギュアスケートを観戦・鑑賞する女子学生が多く、この結果は大学生を対象とした先行研究結果³⁾と同様であった。

競技場などでの直接的なスポーツ観戦は、全調査対象学生の60.90%が経験していた。男子学生では観戦種目が野球とサッカーに集中し、それ以外では小値ではあるが、ラグビーとマラソン・駅伝でも認められた。一方、女子学生では、野球、サッカー及び陸上競技であった。なお、男子学生及び女子学生ともに運動系部活動の種目と観戦・鑑賞する種目の経験との関連性は認められなかった。

今後、何らかのスポーツ種目の観戦・鑑賞の希望については65.38%の学生が希望すると回答していた。男子及び女子学生にて共通して観戦・鑑賞を希望する割合が多いスポーツ種目は、野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールであった。また、主としてゴルフとテニスといった個人競技の希望率が比較的高値であった。加えて男子学生ではボクシング、女子学生ではパドミントンとフィギュアスケートの希望率が高くなる傾向を示した。加えて、ラグビーは経験群とスポーツ学生群が、非経験群よりも高値となる結果を得た。

本研究では、大学初年次学生を対象に高等学校での運動系部活動の所属経験がスポーツ種目の観戦・鑑賞に関連があるのではないかと考え、質問紙調査を用いて実態把握を試みた。男子学生および女子学生ともに運動系部活動の経験と観戦・鑑賞経験との間に明確な差異は認められなかった。その理由として、本研究で調査対象となった学生の90.38%が何らかのスポーツ観戦・鑑賞経験を有し、“みるスポーツ”への関心が総じて高かったことが考えられる。

以上のことから、大学生のスポーツ観戦・鑑賞の行動には高等学校での運動系部活動の経験以外の要因が考えられる。

5. 結論

- (1) 本研究で調査対象となった学生の90.38%が何らかのスポーツ種目の観戦・鑑賞の経験を有していた。
- (2) 高等学校での運動系部活動の所属経験とスポーツ観戦・鑑賞と関連があると予測したが明確な関連は認められなかった。
- (3) 観戦・鑑賞する学生の割合が多い種目は野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールであった。
- (4) 今後、観戦・鑑賞を希望する種目では野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールといった球技系のチームスポーツに加えて、ゴルフとテニスといった個人競技が挙げられた。女子学生はパドミントンとフィギュアスケート、男子学生ではボクシング、経験群は、非経験者群に比べてラグビーの希望率が高くなる傾向にあった。

参考文献・引用文献

- 1) 公益財団法人日本生産性本部余暇創研(20119)余暇活動への性・年代別参加率(2017年)趣味・創作部門, レジャー白書2018, p43
- 2) 公益財団法人日本生産性本部余暇創研(20119)参加人口の性・年代別構成比(2017年)趣味・創作部門, レジャー白書2018, p47
- 3) 公益財団法人全国大学体育連合(2017)みるスポーツ、スポーツ観戦やスポーツに関する情報収集, 大学生のスポーツライフ経験と意識に関する調査報告書, p12-15
http://daitairen.or.jp/?page_id=622&page_type=file_single&file_id=170309113213(最終アクセス 2020年9月9日)
- 4) 文部科学省(2010)スポーツ立国戦略, https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/1297182.htm (最終アクセス2020年10月22日)
- 5) 文部科学省スポーツ庁(2011), スポーツ基本計画,
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm(最終アクセス2020年9月9日)
- 6) スポーツ庁,(2018)平成30年度「スポーツの実施率状況等に関する世論調査」について～成人の週1日以上スポーツ実施率は55.1%(29年度51.5%)へ向上～, https://www.mext.go.jp/sports/content/1413747_001_1.pdf
(最終アクセス2020年10月31日)